

発達の観点からみたオノマトペの研究

－ 言葉を生み出す過程 －

山田丈美・林 美里・八桁 健・梅田裕介・水野友有
ダーリンプル 規子・中島賢介・田邊圭子・高村真希

The Study of Onomatopoeia from the Developmental Perspective

－ The Process of Language Production －

Takemi YAMADA, Misato HAYASHI, Ken YAGETA, Yusuke UMEDA,
Yu MIZUNO, Noriko DALRYMPLE, Kensuke NAKAJIMA,
Keiko TANABE, and Maki TAKAMURA

研究紀要 第23号 別刷 (2022年3月)
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

Reprinted from THE JOURNAL of
CHUBU GAKUIN UNIVERSITY, CHUBU GAKUIN COLLEGE
No.23 : 77 – 89 (March 2022)
SEKI, GIFU, JAPAN

発達の観点からみたオノマトペの研究

ー 言葉を生み出す過程 ー

The Study of Onomatopoeia from the Developmental Perspective

ー The Process of Language Production ー

山田 丈美¹⁾・林 美里¹⁾・八桁 健¹⁾・梅田裕介¹⁾・水野友有²⁾

ダーリンプル 規子³⁾・中島賢介⁴⁾・田邊圭子⁴⁾・高村真希⁴⁾

Takemi YAMADA, Misato HAYASHI, Ken YAGETA, Yusuke UMEDA,
Yu MIZUNO, Noriko DALRYMPLE, Kensuke NAKAJIMA,
Keiko TANABE, and Maki TAKAMURA

抄録：昨今、さまざまな分野でオノマトペによる表現が注目されている。本論文では、これまでのオノマトペに関する論文レビューを通して、オノマトペの定義の再検討と子どもの言語発達におけるオノマトペの位置づけと意義づけを行った。具体的には、①言葉・文化、②心理・人間関係、③身体表現、④造形表現、⑤生活・環境の分野において、文献レビューを行った。また、子どもの活動場面におけるオノマトペの実態調査の結果を示し、これまで手が付けられてこなかった発達の観点から、新たなオノマトペ調査研究の方向性と可能性を提示した。

キーワード：オノマトペ、発達、言語獲得

I. 研究の背景

オノマトペを辞書で引くと「〔名〕(フランス onomatope) 擬声語および擬態語。擬音語。オノマトペア。」(日本国語大辞典, 2006) と説明されている。日本では主に1960年以降、擬音語・擬態語として研究されてきた。また、天沼(1974)や浅野・金田一(1979)により先駆的に擬音語・擬態語辞書が編纂され、その後、山口(2003)の擬音語擬態語辞典や小野(2007)のオノマトペ辞典が出版された。小野(2007)は、「オノマトペとは、これまで、擬音語(または擬声語)・擬態語などとも呼ばれてきた言葉の総称」とし、「オノマトペという言い方を用いる理由の一つは、擬音語・擬態語をまとめた言葉だからだ」との見解を示している。荻阪(1999)は、「擬音語・擬態語はわれわれが感覚器官を通じて知覚する外界の刺激を直接的に表現する語」と説明し、「擬音語や擬態語は、感覚や身体表現を『運動』あるいは『動き』という次元で表現する特性をもつと同時に、心の動きのダイナミクスをうまく表現するユニークな言語である」とも述べている。

本研究では、オノマトペを「人間の活動の中で捉えた音や状況・様子を直接的に模写して表現した言葉」と考

え、既に汎用性のある言語として定着している定型化されたオノマトペだけに着目するのではなく、発達の視点から、言語実態をもとに子どものオノマトペを捉えていく。子どものオノマトペの発現前後の状況を含め、多角的な視点で発達における子どものオノマトペの実態を明らかにすることにした。

II. オノマトペの言語的位置づけ

言語発達の観点からは、国立国語研究所(2004)の『分類語彙表(増補改訂版)』を参考にする。言語の意味的範疇の中項目は、1 抽象的關係、2 人間活動の主体、3 人間活動—精神および行為、4 生産物および用具、5 自然物および自然現象、と分類されている。本研究は子どもの活動と言語実態を研究対象とすることから、3 人間活動—精神および行為の範疇に着目する。「人間活動—精神および行為」は、さらに、心・言語・芸術・生活・行為・交わり・待遇・経済・事業の項目に分かれている(体の類・用の類)。この分類は、保育・幼児教育の領域とも関連する。「心」「交わり」は人間関係、「言語」は言葉、「芸術」は造形表現・音楽表現、「生活」は環境、「行為」は身体表現・健康と捉えることができる。

1) 教育学部子ども教育学科

2) 人間福祉学部人間福祉学科

3) 短期大学部幼児教育学科

4) 北陸学院大学人間総合学部子ども教育学科

言語が発達し、意味も多様化していく過程において、オノマトペはどのような働きや役割を果たすのか。その究明のため、共同執筆者の専門性を生かし、子どもの言語実態を多面的に捉えていく。子どものオノマトペの実態を多角的にとらえるため、前掲の言語の意味的範疇の項目（国立国語研究所，2004）と子どもの言葉の実態を捉える5領域の「窓」（観点）を参考として、オノマトペの文献を概観し、本研究の実態調査を行う際の視点を新たに導く。そのために、本研究の見出しを、1）言葉・文化、2）心理・人間関係、3）身体表現、4）造形表現、5）生活・環境の各観点とする。各観点からオノマトペの文献を概観し、本研究の実態調査を行う際の視点を新たに立てる。

1. オノマトペの観点別概観

1) 言葉・文化

荻阪（1999）は、「日本の文学や詩歌も擬音語や擬態語という『感性のこぼれ』によって豊かでつやのある情感を表現してきた」と言い、文学・文化の側面からオノマトペの効果や役割を評価している。山口（2019）は、文学作品におけるオノマトペの効果について、斬新さ・感覚刺激・リズム感・重層効果・機知の5項目を付与することを挙げ、重要な役割を演じていると指摘している。『短歌の技法 オノマトペ 擬音語・擬態語』（1999）では、「概念化した擬音・擬声語を避けて、対象（素材）をよくみつめ、状態をたしかめて、その音に含まれている音楽的な響き、リズムの特徴、変化、実感をとらえて使用すると、秀歌が得られる」と指摘されている。

平田（2021）は、「文学表現において使われるオノマトペに関しては、その『私的言語』性について議論されることが多い」と述べている。「言語の持つ社会的制約を外れた表現となるため、何かを誰かに伝えるということと、自分の感覚をなるべく正確に表現することを天秤にかけたとき、後者に重きを置く言葉である」と言う。平田（2021）の「社会的制約を外れた表現」という点は、ことばの習得の初期段階にある乳幼児にもあてはまるのではないかと推察することができる。

山田（2006）は、児童生徒のオノマトペ使用の実態調査や新聞見出しのオノマトペ調査等を行い、オノマトペの用法を、Ⅰ慣用的用法、Ⅱ慣用的用法とのズレを意識した用法、Ⅲ独自の用法、Ⅳ誤用、の4つに分類した。平田（2021）の「社会的制約を外れた表現」は、山田（2006）のⅡおよびⅢの用法に相当する。ⅠおよびⅣは日本語の通例に基づく社会的制約を受ける部分であり、ⅡおよびⅢは言語文化・言語生活の豊かさに関わる自由な表現の部分である。

佐藤（2019）は、オノマトペを「或る音声や様態を言語音によって模倣的に、或いは象徴的に捉えるオノマトペの言語的特質は、音が意味に直結している点にある。

即ちその音自体が直截的に意味を喚起、伝達するのであり、そこに他の言語記号とは異なるオノマトペ固有の性格が認められる」とし、詩などでオノマトペを他の言語で等価的に翻訳することが不可能であるという前提で翻訳テキストを分析することの必要性を主張している。子どものオノマトペを考える際にもこれと同様なことがいえる。

我々大人は子どもの表出したことを何でも理解できるという認識の下で説明しようとする。しかし、子どものオノマトペはあくまでも子どもが自己に忠実に表現しようとした結果として生じた言葉であり、その忠実さゆえにその子ども、あるいは子どもたちにしか理解できないオノマトペであるという認識を持つことが必要である。

2) 心理・人間関係

心理学の視点から見たオノマトペ研究はどのようにされてきたのであろうか。

心理学においては、音とそのイメージとの結びつきである「音象徴 sound symbolism」について、古くから研究がされてきた（秋田，2021）。そして、特に2000年代以降は、言語の起源に音象徴が関与したという古典的な仮説が再び注目され、様々な研究がされている。例えば、Ramachandran & Hubbard(2001) は、「言語の起源の謎への解決は、共感覚（一つの刺激に対して、ある一つの感覚だけではなく、違う種類の感覚も自然に生ずること）から来ている」と考え、一つの実験を行った。それは、「ブーバ」と「キキ」という音が、2つの図形-1つは複数の尖りのある図形、もう1つは、曲線で囲まれた図形-のどちらに合うか、という実験である。結果は、95%の人が尖りのある図形が「キキ」であり、曲線で囲まれた図形が「ブーバ」であると答えた。言語音が聴覚以外の感覚イメージを引き起こしているこの現象は、「ブーバ・キキ効果」と呼ばれているが、Ramachandran らの研究から、人々は共感覚を持って音と形に何らかの関係性を見出している、と考えられる（平田，2021）。そして、この音と聴覚以外の感覚イメージとに強く直接的な関係性を持っていることを音象徴と言ひ、オノマトペ（擬音語・擬態語）はこの音象徴性の性質を持っている（秋田，2021）。Imai(2008)は、言葉の学習において、知らない動作と知らない言葉を学ぶ際、オノマトペの方が学びやすいかどうかについて実験をした。ウサギが動作をしているスライドを提示し、3歳児に、①動作とオノマトペがマッチングした条件、②動作とオノマトペがあていない条件、③動作に無意味音声をつけた条件、という3つの分類で、例えば①の場合は、「みて。『のすのす（この部分が変わる）』している」と教示した。その後、同じ動作をクマがしているものと違う動作をウサギがしているものが載ったスライドを示し、例えば①の場合は、「『のすのす（この部分が変わる）』しているのはどっち？」とテストしている。結果は、①の動作とオノマトペがマッチングしている場合が、同じ動作のものを正しく答

えた子どもが82%と最も高くなった。この研究において、動詞の学習に関しては音象徴（オノマトベ）の役割が重要になることがわかった。

言語のはじまりについて考えた Imai (2014) は、まだ話すことのない乳幼児はこの音象徴への感受性が強く、音象徴が乳幼児に言語音が、何かさし示しているものと言葉に相互参照的な関係があるという洞察力を得させるのに役立ち、言語の獲得・発達へとつながっていくことを述べている。胎児・乳児は、母親や周りの大人から発せられる音声に特異的に反応する(平田, 2021)。そして、その言葉の意味が分からなくとも、音声の特徴から、その情緒や状況を探ろうとし、それが、乳幼児－養育者間の情緒的コミュニケーションの一つとなる(Bateson, 1975)。そして、それと同時に、オノマトベを足がかりに初期の言語獲得を行うと言われている(平田, 2021)。なぜ、オノマトベが足がかりとなるのか。今井(2020)は、オノマトベが場面全体を表すことができ、声色・発話の速さ・リズムなどで感情を乗せ、劇場的な効果を作れることから、子どもはオノマトベが好きで、「もっと聞きたい、話したい、言葉を使いたい」と思う、と述べている。そして、さらに、オノマトベに親しむことで、言語の様々な性質を学ぶことができるという。オノマトベは、乳幼児が言葉を学習するうえで、好奇心や意欲を向上させ、楽しく学ぶことができる機会をもたらすものと言える。

3) 身体表現

身振りやジェスチャーなど身体による表現も言語表現の一つと捉えることが出来る。藤井(1999)は、幼児、児童、大学生と年齢が上がるにつれて発話時間が長くなるのに対して、身振りの使用頻度は幼児と大学生に差が見られず、児童期に一時減退するU字パターンを示すという結果を報告している。また、大学生の身振りは「身体の一部である手に集約」され「発話と分離可能になり、身振りとして自立」するのに対して、幼児の身振りは「発声と手の動きを含めた身体中が一体となって機能する表現全体から切り離すことができないもの」であり、「メッセージの伝達において発話と不可分で補完的役割を果たす」とし、大学生と幼児の発話における身振りの役割の違いを示している。

喜多(2002)は、オノマトベを「様々な情報源(視覚、聴覚、触覚、嗅覚、感情、運動、空間的思考など)から得られた情報を命題化せずに『生のまま』でとらえ、ある状態または出来事を表現したもの」としている。このようなオノマトベの特性は、動きとイメージを結びつけやすくする。そのため幼児の身体表現活動において、保育者の言葉がけにオノマトベが使用されることは多い。村瀬ら(2020)は、オノマトベが幼児に想起させるイメージと動きには、「する型(動詞であらわされる)」(例: 回転する)、「になる型(そのものになりきる)」(例: 雨粒になる)、「である型(状況や情景を表す)」(例: 傘を

さして雨である状況を表す)があり、オノマトベによって幼児が想起するイメージと現わす動きの容易さが異なることを報告している。その要因として、オノマトベを通して幼児が持つイメージには、生活の中の「みる」「触る」などの体験に基づくものが多く、経験に左右される(高原ら, 2011)ことが挙げられる。また、オノマトベを3～4人の幼児でイメージを共有して動いた場合、互いに刺激しあい、新しいイメージを想起することに繋がる様子が報告(小川ら, 2013)されていることから、仲間など他者の存在も考えられる。

幼児の発話と身振りは、不可分で補完的役割を果たす。発話の中でもオノマトベは、様々な情報源から得られた情報を命題化せずに「生のまま」でとらえ、状態や出来事を表現できるため、身振りを含む「まるごとの身体」との親和性は高い。幼児の身体表現において、動きを生み出すためのイメージには体験や経験、仲間など他者の存在が関係しており、それが新しいイメージへの想起にも繋がる。幼児が言語表現としてオノマトベを生み出す際のイメージにも同様のことが考えられる。

4) 造形表現

造形表現分野におけるオノマトベに関する研究は、2021年時点ではまだほとんど見受けられない。そのような中で、松崎ら(2017)による「小麦粉粘土活動における幼児のオノマトベ」は、造形活動の一つである「小麦粉粘土活動」を取り上げ、そこに見られる幼児のオノマトベの分析から、幼児の感覚と言語表現との関わりについて検討した数少ない論文である。松崎らはこの研究において、触感の快・不快とオノマトベの関係に着目し、小麦粉本来の乾燥した状態から得られる快適な触感を表すオノマトベと、水分を含んだ状態から得られるやや不快な触感を表すオノマトベとでは、後者の方が触感を表すオノマトベの出現数が多く、また、その語・形態も多様であることを明らかにしている。これは、幼児各自が、抱いた不快さの触感を細かく表現し分けるために、促音・長音などの強調要素を挿入・追加したり開拗音を用いたりすることによって、定型的なオノマトベに留まらず、その語・形態を多様に広げていったのではないかと松崎らは考えている。

この他、磯部ら(2014)は『造形表現・図画工作』の中で、子どもの造形表現にあらわれる音(オノマトベ)として、線を描けるようになった幼児が、描く線に合わせて「ピーーっ」「ぐるぐるぐる……」と声を発する場面に着目している。この場面について磯部らは、幼児が、自身から発せられる音や画材との間に生まれる、リズムや感触に押されるように造形表現していると述べている。これらのことから、オノマトベを造形表現の観点から捉えると、造形表現において大切な、環境や素材から感じ取る場面、そこから色や形に表現していく場面、いずれの場面でも、幼児がオノマトベによって表したい感覚や動作を補完していることがわかる。造形表現は身

体表現同様、自らが表現主体となる行為であるゆえ、そこから生まれるオノマトペは、より感覚的かつ身体的なものが生まれていると推察される。

5) 生活・環境

「環境」という用語の示す範囲は多岐に渡る。その中で、乳幼児期の言葉の獲得を支える「言語環境」について千古(2019)は、生活の中心が遊びである乳幼児は、遊びの中で言語を獲得するため、言語環境は遊びそのものであるとしている。では、生活や遊びといった言語環境を支える基盤はどこにあるのだろうか。今井(1996)はまだ意味のある言葉をもたない乳児期の言葉を育てるためには、自分の世話をしてくれる大人と関わり、コミュニケーションする楽しみを味わうことが重要であるとしている。特定の大人との交流の中で生じた快い感情が、甘え、訴えたいという気持ちを高めていくとし、そういった特定の大人との親密な関わりを通して言葉の素地が作られていく。つまり乳児期の言語発達は、身近な大人と気持ちが通じ合うことの心地よさに裏付けられ、自分の発した言葉をきき誰かが受け止めてくれるという「安心感」や「よろこび」が基盤にあると考えられる。心地よい感情は乳児にとって情緒の安定をもたらす、それが音声を発しやすい状態を作るのではなかろうか。このような言語環境の中に、幼い頃に発せられるオノマトペの原型があると思われる。

そして、上記のような大人との間の温かな関係から得た心地よさを土台として、乳幼児はさらなる心地よさを自ら味わうために環境に自発的に関わり始める。そこに「遊び」という活動が誕生し、遊びに没頭しながら、乳幼児は自分の体験を様々な方法で表現しようとする。その一つが言語であり、乳幼児期のオノマトペ表現と言えよう。このような大人との関わりや心地よさを求める営みは乳幼児の日々の「生活」そのものであり、そこから生じる「環境」と自発的に関わる「遊び」が乳幼児の言語獲得に大きな影響を与えていることが読み取れる。

千古(2019)は乳幼児の言語について、瞬間の感情や感覚を数少ない獲得語彙に置き換えたもの、感じたままを言葉に乗せたようなものと表現している。さらに、子どもの言語コミュニケーションは他者の存在を確認して行われたいとしている。このような乳児期から幼児期初期の言葉が、前述のオノマトペであり、既に定着した言語ではなく、自分の過去の獲得語彙やその場で感じた状況を、文脈の中で「その子なりの表現」によって紡がれたものである。一般的な言語は「誰かに何かを伝える手段」であるため、他者が必ず存在する。しかし、オノマトペの場合、他者に何かを伝える手段である一方、前述のように「他者の存在を確認して行われたい」ものともなる。では、オノマトペの意義や役割は何なのだろうか。

今井(1996)は、乳幼児は遊びながら自分の行動やイメージを言葉に置き換え、その行動をしている自分とい

うものを意識化していると述べている。ここにはおそらく他者の存在は求められず、「自分は今こんな活動をしている」「こんなことができるようになった」と、遊びの中での動作や考えを独り言のようにオノマトペ表現として表出しているという意味があるのではないか。これは、表現という行為を通して自分と向き合い、自己確認をする役割があるだろう。このような独り言のような音声や何かを模倣した音声に対して、受け手が同じような発声をして共感したり、伝わる言葉に置き換えたりすることで、意味ある言葉になっていくと考えられる。また、オノマトペはその子なりの表現であるため、同じ表し方であっても多様な解釈が可能であり、文脈の中で初めて意味をもつものである。

それらを踏まえ近藤ら(2008)は、乳幼児が「環境」と関わる中で表出されたオノマトペには、「知的な気づき」の要素が含まれているとしている。グルグルとゴロンゴロン、どちらも転がる表現であるが、これは転がる様子を子どもが捉え(例えば転がる速さや形など)、自分の感覚にぴたり一致する表現で説明したものである。これは環境にじっくりと関わり、その様子を「分かつ」「分かつたい」とする姿勢が存在する。ここでのオノマトペ表現は、自分が環境を深く理解すること(知的な気づきの育ち)に繋がるだけでなく、それが他者と自己の感覚を共有する共有言語になることもある。触覚や状態の表現など、子どもが生活の中で環境と関わり、遊びを通してそれを表現する過程で生まれるオノマトペについても同様に言及されている。

2. まとめ

本研究では、オノマトペを「人間の活動の中で捉えた音や状況・様子を直接的に模写して表現した言葉」と定義づけてきた。そして、前項までの文献レビュー研究では、子どもの言語が発達し意味も多様化していく過程における、オノマトペの働きや役割に焦点を当て、5つの観点から分析を進めた。その結果、子どものオノマトペ表現や言語獲得を捉えるための3つの視点を新たにまとめ直した。

- ①子どものオノマトペはあくまでも子どもが自己に忠実に表現しようとした結果として生じた言葉である。この性格は文学における表現のあり方とも共通する。
- ②オノマトペは音と聴覚以外の感覚イメージともかかわっている。特に、図形等のイメージ、触感の快・不快、身振り等との関係性・親和性が高い。
- ③オノマトペは、乳幼児と養育者との情緒的コミュニケーションの一つであると同時に、初期の言語獲得に大きく関わる。その際、人的・物的環境が影響する。

従来のオノマトペ研究の手法は、大人が提示した定型的なオノマトペ表現について、どのような場面でその表現を用いるか質問紙調査などから分析するという、いわ

ば設定された条件下による研究が主であった。しかしながら、今回の文献研究から得られた3つの視点が示す通り、定型化されたものではなく、子どもが環境に主体的に関わりながら、身振り等も交えて行う「自由」な表現こそが言語獲得において重要な意味をもつことが示された。また、情緒的コミュニケーションの重要性や、子どもを取り巻く多様な環境の重要性についても言及された。これらは、従来の定型的なオノマトベの認識を大きく超えるものではなかろうか。

文献レビュー研究結果をふまえ、次項からは実際の子どもの実態に即して研究を進めていく。その際、種別の異なる2つの幼児教育施設における実態調査を行うこととする。実態調査に先立ち、文献検討からまとめ直した子どものオノマトベ表現や言語獲得を捉えるための3つの視点を、実際の子どもの表現を捉えるための視点として以下のように整理した。

視点1 子どもの自由な表現から捉える

他者から与えられた定型的な表現だけではなく、子どもから生み出される自由な表現をありのまま読み取ること

視点2 多様な感覚と動作等から捉える

子どもが諸感覚をはたらかせる場面に着目し、言語に付随する動作にも焦点を当てて読み取ること

視点3 多様な環境との関わりやコミュニケーション的側面から捉える

子どもを取り巻く環境にも焦点を当て、そこで生じる環境との対話について読み取ること

以上3つの視点にて子どもの表現を分析することで、子どもの言語発達やオノマトベの役割をより具体的かつ実態に即して明らかにする。

Ⅲ 子どもの活動場面におけるオノマトベの実態調査

子どもの活動場面におけるオノマトベの実態調査を上記3つの視点から実施した。研究1として子ども家庭支援センターで親と子どもが共に過ごす中から生み出される子どもの表現について、研究2として幼稚園における夏季預かり少人数保育で子どもの集団活動の中から生み出される子どもの表現について捉える。

Ⅲ-1. 親と子どもが共に過ごす経過の子どもの表現活動におけるオノマトベの実態調査（研究1）

1. 目的

豊富なおもちゃなどがあって自由に遊べる環境（子ども家庭支援センター）で、親と子どもが共に過ごす中から生み出される子どもの表現について捉える。調査は、上述の3視点をもとに実施し、結果について考察する。

2. 方法

1) 観察場面の設定と観察対象児

自由におもちゃで遊びながら、親子でのコミュニケー

ションも行っている自由場面にて、1～3歳の子ども6名を対象として記録を行った。

2) 日時

2021年8月17日（火）10：40～12：00

3) 場所

中部学院大学 各務原キャンパス内 子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」

総床面積188.88㎡、戸外砂場オープンデッキ73.125㎡

施設遊具：システムファニチャー（ロフトロッカー）、

木製おもちゃ（野菜、雑貨、陳列台、キッチン等）、人形、ブロック、カプラなど

4) 観察手順と記録

当日参加の親子に観察目的を説明し、承諾を得たうえで、教員3名が施設内に入り親子を観察した。参加観察法による。記録は、手書きによる場面記録、ビデオ録画（施設全体と各遊び場面）、ICレコーダー録音を行った。

5) 観察記録の処理

観察場面1・3においてはエピソード記録の多視点による読み取り、2においては動作と発話のELANを用いた行動観察の手法を用いた解析とし、多様な分析手法を用いて処理・考察を行った。

3. 倫理上の配慮

本研究は、中部学院大学研究倫理審査の承認（受付番号：C21-0028 および C21-0044）を受けている。

4. 結果及び考察

1) 観察場面1. ソフトブロックを用いたお風呂遊び場面（1）結果

左右に分かれる大きな木製の囲いをくっつけて、中にソフトブロックを入れてお風呂遊びをしているA女とB男（姉弟）。ソフトブロックをお湯に見立て「お風呂気持ちいい！」と、遊びの世界に入り込んでいる。母親は「あわあわだね～」とお風呂の中で体を洗う仕草をするA女（3歳1か月）に声をかける。遊びの途中で、飽きてしまったのかB男（1歳9か月）がお風呂の外へ出ようとした。そこで、母親はくっついている木製の囲いを左右に分離して出口の隙間を作り、B男は外へ出た。A女は左右が分離した状態でそのままお風呂遊びを行っていたが、「ガッチャンがいい！」と繰り返し母親に声を掛けた。すると母親は「ガッチャンね」と言いながら、左右に分離した木製の囲いを再度くっつけると、再びお風呂遊びが始まった。

（2）考察

遊びに夢中になり、黙々と没頭している際にはオノマトベの表出は少ない傾向があるように感じられた。おそらく子どもは普段の生活の中で「あわあわ」という表現をよく耳にしていると考えられる。周囲の大人、今回の場合は母親が、イメージしやすい共通言語である「あわあわ」というオノマトベを子どもに投げかけたことにより、大人も一緒に遊びの世界に入っていることを子どもに伝える役割があったのではないだろうか。オノマトベ



図1 動作と発話についてのELANを用いた解析

という共通言語が、誰が見ても普通のソフトブロックを、そこにいる親子にとってのみ「お湯」に変化させたのである。ここには、子どもの遊びを共感して受け止めようとする母親の働きかけの意図が感じられる。

お風呂は四方を囲まれた形状であるということは、今までの生活経験で子どもは理解している。囲いを重ねてお風呂遊びの世界に入り込み、心地よい感情であったA女であるが、B男が外に出たことにより隙間が生じ、遊びの世界が崩れたのである。A女にとっては不快な状態が生じたと言える。そこで、自力で囲いを動かすことのできないA女は、再び心地よくお風呂遊びをしたいと母親に伝えるために言語を用いることになる。しかし、囲いを「くつつける」という言葉のレパートリーがないため、囲いがくつついた時の音や動作の中で、今の場面とぴったり重なるオノマトペを用いることで、自分の思いや願いを伝えようとしたと読み取れる。このようにオノマトペは自分の思いや願いを、誰かに伝えるための子どもなりの工夫とも捉えられるだろう。今の状況や場面を子どもなりにしっかりと捉え、他者に伝えるための言語として機能している。今回のように、そのオノマトペを受け止めてくれる他者が存在することで、子どもは言葉と気持ちが伝わったよろこびを感じるとともに、言葉のもつ意味に気付き、ますます言語感覚が豊かになっていくと考えられる。

2) 観察場面2. おままごと場面

(1) 結果

C女(3歳1か月)が食器や食材などを模したおままごとセットで遊んでいる場面において、3分52秒の動画を撮影し、ビデオ解析ソフトELAN6.1を使用して解析をおこなった。

オノマトペを含む発話と、発話以外の行動、他者とのかわりについて記録した。マスクを着用し、他者の音声も記録されていたため、明確にC女が発話したと確定できたのは動画記録中11回だった。そのうち、「ジャー」というオノマトペが含まれる発話が5回、「パッパッ」というオノマトペが含まれる発話が1回、「しょうゆ」という発話が1回、「ママー」「ママもやってー」「わかった」という母親とのやりとりが3回、「エヘヘ」という発話が1回だった。「ジャー」というオノマトペと同時に起こっていた動作は、ほぼすべてが「まな板を皿やカップの上で傾ける」というものだった。1回のみ「ジャー」という発話と同時に、カップの上でレモンの木製玩具を傾けて上下に動かす動作が見られた。動画記録中に「まな板を皿やカップの上で傾ける」という動作は4回見られており、そのすべてで一連の動作のあいだに「ジャー」という発話が確認された。「しょうゆ」という発話は、醤油さしの形の木製玩具を他の物の上で傾けて、「醤油をかけるまね」をする動作の直前から動作の開始初期に確認された(図1)。その直後に、食卓塩の形の木製玩

具に持ち替えて「塩をかけるまね」をする動作の途中で、「パッパッ」というオノマトベが確認された。その直後に、再び醤油さしの形の木製玩具に持ち替えて「醤油をかけるまね」をする動作の際には、発話は確認されなかった。また、波状の凹凸があるまな板にレモンやバナナなどの形の木製玩具をこすりつける動作は、識別できた25回の動作のうち11回（44%）と他の動作よりも頻繁に観察されたが、途中で「ママー」とそばにいる母親に呼びかけた以外では発話が確認できなかった。母親の声かけに応じた動作や発話、手渡された物を扱う動作などのやりとり、D女（1歳1か月）とのかかわりも観察された。

（3）考察

物をまな板にこすりつける動作では発話がなく、まな板を皿やカップの上で傾ける動作では、「ジャー」というオノマトベが発せられていた。また、醤油をかけるまねの動作では水平方向に円を描くような動きが見られ、塩をかけるまねの動作では上下方向に振る動きが見られた。前者では「しょうゆ」という発話が伴う場合もあった。後者では「パッパッ」というオノマトベが発せられていた。動作自体が定型化されてパースの記号論でいう「アイコン（icon）」としての意味を持ち、さらに実物としての「見立て」を明確に示すための手段としてオノマトベが用いられている可能性がある。「しょうゆ」という名詞は1度のみ発話されたが、「ジャー」というオノマトベは1回のまとまりの中で何度も発せられるなどより頻繁に生起していた。完全に恣意的な「シンボル」としての言語である名詞や動詞を獲得していく過程で、対象と何らかの類似性をもつ「アイコン」としてのオノマトベが言語発達を促進する働きをしていると考えられる（Imai et al., 2008）。

3）観察場面3. パズル見せ場面

（1）結果

低い本棚で囲われたカーペットのコーナーに、E女（1歳7か月）とF女（3歳8か月）の姉妹とその母親がいる。本棚の上には、やや大きめの木製パズルが何種類か置いてあり、そのパズルの各ピースには子どもが手に取りやすいように、取っ手が付いている。姉のF女と母親は座って、カーペットの上で木製パズルのはめ込みに取り組んでいる。E女は本棚近くに立っており、付近にはG男（1歳4か月）とその母親がいる。そこで、以下のようなやりとりが見られた。

E女：木製パズルの1ピースの取っ手を持ち、「パッパッ パッ パッ」と言いながら、周りに見せるようにその場で一回転する。

E女の母親：E女の行動に気づき、E女の持っているパズルを指さしながら「大きいね」と言う。

E女：E女の母親が戻したピースをG女の母親が整えた後、E女は他の1ピースを取り出してG女の母親に見せる。※この時は動作のみで音声はない。

G女の母親：E女の見せたパズルを指差し、うんうんと

いうようにうなずく。

E女：パズルを戻す。また、別のピースを取り出し高々と見せながら、今度は「パッ パッ」と言いながら見せる。これを数回繰り返す。

G女の母親：E女がパズルのピースを見せるたびにうなずき、反応してくれている。

G女：E女の母親に近づき、パズルで遊び始める。E女と同じようにパズルのピースを高々と上げたり、パズルを反対むけてピースが落ちる際、「あ〜〜」という音声を発したりする。

E女の母親：姉のF女のパズルが完成し、母親が拍手する。

（2）考察

2組の親子の木製パズルを介したやり取りの一場面である。ここでE女が何度も発した「パッパッ」について考えてみたい。E女が発した「パッ パッ」は[p]の破裂音である。秋田（2021）は、「日本語のオノマトベの音韻的特徴として最もよく知られているのが、語頭/p/の一般性である。語頭/p/は現代日本語の和語では一般に許されない音である」と述べ、語頭の/p/を「不自然」な音象徴と評している。他方、乳幼児の音声について、阪本（1982）は、3〜4か月頃の乳児が発する正確には文字で書き表せないあいまいな声を喃語（なんご）とし、「最初の喃語は、発声器官の偶然の運動から発せられる母音と破裂音」が多いとした。6〜7か月になると「唇の破裂音[m] [b] [p]」が増え『ママ』『パパ』が言えるようになるとする。そして、生後1年経過した頃から、発音しやすい音声に一定の意味が結合した片言を使うようになり、「片言は、まわりの者が、幼児が自然に使っている喃語や、覚えやすい擬声語や擬音語に一定の意味を付けてやることによって成立する」と言う。場面3においてE女が発していた「パッ パッ」という破裂音は、秋田（2021）の言う語頭の/p/であり、日本語の言語音として定着していない音といえる。その発音がE女のその時の心情を表す音であったといえる。その音を母親が受け取り、「大きいね」と意味づけを行った。そのやりとりの中に言葉を生み出す過程がある。

場面3では、子どもが発したオノマトベに母親が通常の語彙で対応していた。小椋（2020）は、「日本の母親の対乳児発話の語彙にあらわれた特徴として、オノマトベ、育児語、音韻転化があげられる」と指摘している。また、佐治・今井（2013）は、言語獲得における音象徴語（特に日本語のオノマトベ）の役割について、親の発話と子どもの理解の観点から実験、考察した。今後は、子どもの発話におけるオノマトベの実態とともに、大人と子どもの対話におけるオノマトベの実態の双方に目を向けていく必要がある。

5. まとめ

乳幼児は自己の体験をイメージしながらオノマトベとして表出したり、表現したりすることの積み重ねで、言

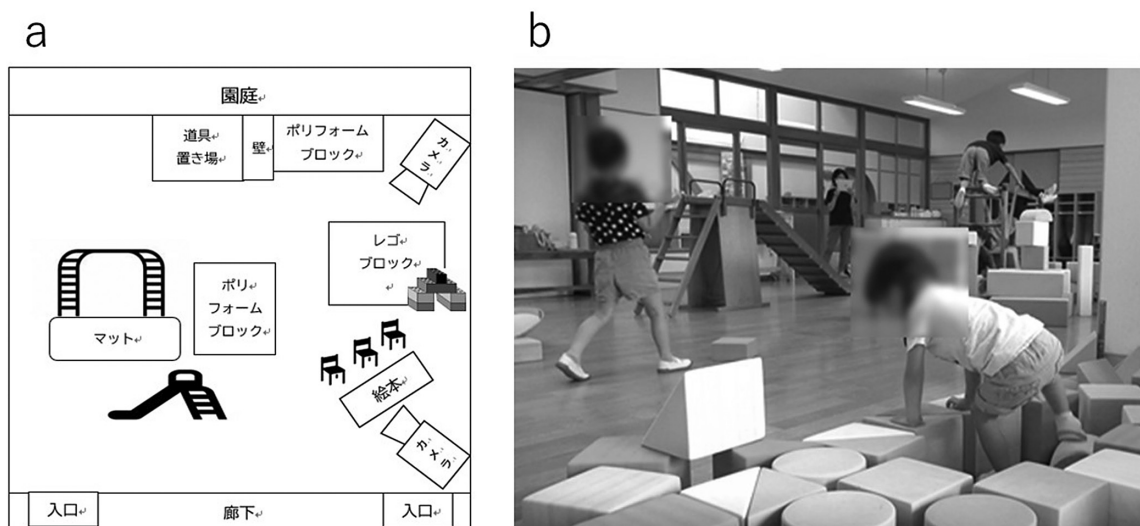


図2 a) 保育室環境図と固定カメラの配置図、b) aの右上カメラから撮影した映像

語感覚が豊かになっていく。実際に場面におけるオノマトペの使用法が言語学的に正しいかどうかではなく、子どもが自己の体験を、日々の生活や環境との関わりの中において表現するための方法、育ちの過程として捉える必要がある。実際の幼児の表現は大人の想像を大きく超えるものであるように、子どもは自己が感じた世界を、言葉にはならないその前段階のオノマトペを通して表すことを楽しんでいるのではないだろうか。その行為の意味についてより深く分析することが、その子どもの感情や状態、発達、遊びの世界などをより深く理解することに繋がる。

Ⅲ-2 子どもの集団活動から生み出される子どもの表現活動におけるオノマトペの実態調査(研究2)

1. 目的

先述の3つの視点から、夏季預かり少人数保育の場面における、子ども同士の集団生活の中での関わりから生み出される子どもの表現について捉える。

2. 方法

1) 観察場面の設定と観察対象児

夏季預かり少人数保育に登園してきた5名(女児2名、男児3名)の保育室での自由遊び場面について記録した。

2) 日時

2021年8月18日(水) 午前10時~11時30分

3) 場所 北陸学院第一幼稚園 ことり組

4) 観察手順と記録

当日、夏季保育担当教諭に観察の目的と撮影方法について説明した後、観察者2名が夏季保育中のクラスに入り、園児を観察した。記録用として、保育室内での幼児の遊びや生活場面を固定したビデオカメラで撮影した。各々の遊び場面における園児の発話や動作等を詳細に観察する際は、手持ちのビデオカメラと手持ちのiPadを併用して撮影した。

5) 観察記録の処理

エピソード記録を作成し、オノマトペの出現とその過程等について考察した。

3. 倫理上の配慮

事前に対象園園長に対して研究の主旨と目的、調査内容と方法、収集データの取り扱いと管理について十分に説明し、同意を得た。その後、保護者にも書面にて同様の説明を行い、承諾書にて同意を得た園児のみを調査対象とした。なお、本研究は、北陸学院大学倫理審査委員会の承認(受付番号:2021-7)を得ている。

4. 結果及び考察

1) 観察場面1. ブロック遊び場面

(1) 結果


B子(2歳4か月)が遊んでいた※1口の字型のレゴブロックを床に置き、ブロックのコーナーを離れようとすると、保育者が「ここにブタさん入れておくよ」と、※1の中にブタの形のブロックを入れた。B子は、両手を飛行機の翼のように広げ「あぁ〜」と言いながら走ってブロックの場所に戻り、※1を見つめ、「あ〜」と大きく口をあける。その様子を見ていたA子(2歳8か月)は「キャッ」と声をあげ、B子の後を走りながらついてくるとブタのブロックを持ち上げるがB子に奪われる。保育者が「かえしてだね」とB子に声をかけると、B子はブタを元の場所に戻し、A子を見つめながら押す。A子は押されたことでその場を立ち去ろうとするが、すぐに戻り、別のブロックを手にする。その様子を見守っていた保育者がA子の前にそっと人形のブロック置いた。

するとA子は、人形のブロックを右前から右後ろに大きく滑らせる。保育者が次にL字型につながっているブロックをA子の前に置くと、A子は持っていた人形をL字型ブロックの手前に置き、L字型ブロックを自分の方へ引くように滑らせる。1回目は、スムーズに滑らず人形は前へ倒れてしまったものの、2回目はA子の腕の動

きに合わせてブロックが床を滑っていく。次に保育者がL字型ブロックにもう一つブロックをくっつけ、コの字型に変化させ、その上にA子の持っていた人形ともう一体、別の人形をはめた。B子も同じようにL字型ブロックにブロックをはめこむ。人形のブロックをはめ終えた保育者が「できたよ」と声をかけると、A子はブロックを手前に滑らせたものの、突然「しゅ～」と言い、腕を勢いよく大きく動かし、片膝を立てた状態でブロックを押しながら滑らせて前進していく。A子の様子を見ていたB子は、※1を取りに行き床に置くと、その前に寝そべり、ブロックを押しながら身体を後ろへ滑らせていく。B子の場合、ブロックが動くのではなく、自身がバックしている。その様子に保育者が「どこ行くん？（どこへ行くの？という意味）」と声をかけるとB子は動きを止め、ニヤッと笑いながらブロックの場所に戻ってくる。さらに保育者が「どこ行くん？」と声をかけるとコの字型ブロックをA子の側に置き直して寝そべり、「う～う～」と言いながらブロックを持ったまま前進しようとするが進まない。すると、B子は保育者に「持っていて…（何を話しているのかわからない）」と声をかける。保育者がB子の両足を持つと「しゅ～うしゅ～う」と発する。保育者はそれに応えるようにB子の足を片方ずつ上下に揺さぶった。その後B子は「しゅ～」と発しながら片足ずつ動かし、膝も使いながら前進し始めた。

(2) 考察

保育者がA子のイメージを汲み取り、人形のブロックが動かないようにはめ込んだことにより、A子の遊びはブロックを大きく滑らせて動かす動きへと変化した。A子にとっては当初のイメージとは異なる動かし方ではあったが、自由に動かせるようになったことにより「しゅ～」というオノマトベが生まれたと考えられる。また、A子にとって「しゅ～」と表現する音の動きは、遊びの経過とともに「腕を動かしブロックを動かす動き」から「体全体を動かしながらブロックを動かす動き」の音へと変化していったことがうかがえた。この「しゅ～」という音が、一つの遊びの中であっても多様に使用されると理解できた。

次にB子の「あぁ～」という発声と動きからは、感情をうまく言葉で伝えることができないB子が音と身体の動きを通して「片付けないで」という思いを表したと捉えた。この音がいずれ擬情語として変化していくのではないか。藤田（1990）が3歳児は自分の感情をだれかに強く訴えようとするとき言葉をリズムカルに唱えると述べるように、B子が咄嗟に発した発声には強い思いが含まれていると考えることができる。

B子は、A子の「しゅ～」とブロックを動かす動作と発声に反応し、同じようにブロックを取りに行った。この時のB子のイメージしていた「しゅ～」の動きは、A子の動きであっただろう。しかし、B子の動きはA子とは異なるものであり、B子はイメージと実際の体の動き

に戸惑ったのではないだろうか。そんな時に保育者から「どこ行くの？」と声をかけられ、「しゅ～」の動きを再現しようと試み、「うっう～」という発声をしている。この様子から、幼児は身体をイメージ通りに動かす掛け声として無意識にオノマトベを発することがあると捉えられる。

その後保育者が、B子の「しゅ～うしゅ～う」の発声からB子のイメージ（動き）を受け取り、足を交互に動かしたことにより、B子は自身のイメージに合った体の動かし方を体得していった。B子は「しゅ～」というオノマトベを通して、モノと人と関わることにより心を動かし、音を身体化していった。

2) 観察場面2. ラダーと箱積み木を組み合わせた基地を中心とした場面

(1) 結果

クラスの左方に、固定遊具のラダーが置かれており、落下防止のためにラダーの下にマットが敷いてある。年中男児3名（A男：5歳0か月、B男：4歳10か月、C男：5歳0か月）は、ラダーと箱積み木を組み合わせて自分達の基地を作り、基地を中心に3人の遊びが展開された。

C男は基地づくりを続けているが、A男とB男は前後に連れ立ち、基地を中心に「うわー」、「やー」、「きゃー」と高い声を出しながら保育室全体を走り回っている。単に走るだけではなく、途中わざとおどけたり、顎を少し突き出し「うっうふー、うっうふー」と言いながら走ったりすることがあった。走りながら、C男が一生懸命作った箱積み木の基地の上に乗る、積み木が崩れるとC男から「積み木に乗らないで！」と注意された。

3人はクラス内を各々バラバラに動き始めた。B男は歩きながら独り言のように変身のための口上を呟いた後、おそらく正義の味方であろうと思われる何かに変身し始めた。そして、突然その場で駆け足しながら手足をばたつかせると、「ぐおーい」と低い声を出しながらラダーの上に戻っていたC男に向かって何度も飛びかかるしぐさを見せた。

箱積み木の基地とラダーに再び3人が集まり、会話による互いのやりとりが見られたが、上述のような動作を伴う発語も見られた。A男は、基地である箱積み木の上を「うおー」と低い声を出しながら登りきると、体を軽く左右に振りながら、少しおどけた表情で「まーだでんちん」と言い、床に飛び降りた。C男は、A男が何気なく発した「ノー」という言葉を受けて、壊れた箱積み木の基地を「ノーノーノー」と言いながら直し始めた。A男はC男のお腹を「とんとんとん」と言いながら指でつついた後、滑り台の斜面を登り、斜面中ほどから床に飛び降りた直後「ぶわっわー」と声を発した。A男は再び保育室を走り始めると、床に置いてあったバランスボードを飛び越え、着地すると同時に「ジャン」と言った。

(2) 考察

A男とB男は様々な声を出しながら保育室内を走り回り、行動範囲が広いのに対して、C男はラダーと基地から1度だけ離れたがすぐに戻ってきた。C男が箱積み木を直しながら発した「ノーノーノー」は、否定の意味ではなく、箱積み木を直す動作につけた自作の音声のようであった。しかし、C男はラダーの上を移動する時も声を発しておらず、他の2人と関わる際は、「積み木に乗らないで」や「これできる?」のような会話文を用いており、A男・B男の2人とC男に言語表現の違いが見られた。

A男とB男が走りながら発する声を、最初は感情の高まりから発せられる叫び声と捉えていた。しかし、観察する中で、動きや動作の変化に呼応するように「うわー」、「やー」、「きゃー」等の声そのものに加え、声の高さや強さが変化する様は、内面を含めた身体全体の変化を現しているようであった。また、A男とB男から、「うっうふー」、「ぐおーい」、「まだでんちん」、「ぶわっわー」のような独特のリズムを持った独自のオノマトペが発現した。喜多(2002)がオノマトペを、五感や感情等様々な情報源から得られた情報を命題化せずに『生のまま』でとらえ、状態や出来事を表現したものと定義していることから、A男とB男が発した独自のオノマトペは、2人の「今その時」を生のままでとらえ、表現していることが考えられる。大人に比べ、語彙が少ない幼児の場合、定型のオノマトペだけでなく、A男やB男のように、身体の動きに共起する音声や子どもが独自に作り出すオノマトペにも着目する必要がある。

3) 観察場面3. 迷路の絵本を一緒に読む場面

(1) 結果

年中児のA男(5歳0か月)、B男(4歳10か月)、C男(5歳0か月)は椅子に座り、C男を真ん中にして3人で一緒に1冊の迷路の絵本を読み始めた。この絵本は、見開きのページ毎に異なる場面の迷路が描かれており、どのページも「スタート」は左下、「ゴール」は右下である。3人は、迷路のゴールを目指すだけでなく、迷路に描かれている細かな絵を指差しながら「これ見てー」、「これは〜」、「これ何だかわかる?」等と絵について互いに話をする場面が頻繁に見られた。途中B男は、急に絵を指さしながらC男と笑い始めた。2人で面白さを共有した後、B男が突然「まんばらっぱあ」と言った。

C男は最初、指で迷路を辿りながらゴールを目指していたが、B男は道を探してゴールに辿り着くことに飽きてしまった。B男はC男の指を持って「ガキン、ガキン、ガキン」と言いながら軽く絵本にぶつけるように上下させたり、「ジャンプ」と言いながらC男の指を持ったまま空中に弧を描き、スタートから一気にゴールさせたりした。するとC男は次のページをめくり、ページの上に「ガン、ガン、ガン」と言いながら拳を軽く打ち付け

た。だんだん迷路に飽きてきた3人は絵本から浮かした指で弧を描き、「ジャンプ」と言いながら「スタート」から「ゴール」までの最短距離を一気に辿りつくようになる。その後も最短距離でのゴールは続き、「ジャンプ」、「うえーえーえーい、ゴール」と言いながら指で空中に弧を描いたり、絵本の上で指をくねらせ「びろーん」や「せーの、いえーい」と言いながらゴールしたりしていた。

(2) 考察

場面2と異なり場面3では、3人とも椅子に座り、1冊の迷路の絵本を見ながら「これは〜」、「ここに〜がある」、「これ見てー」等と言いながら指で絵を差し示したり、気ままに迷路の道を指で辿ったりしながら会話していた。そのため、指の動きに呼応したオノマトペが比較的多く発現した。空中に指を浮かして動かす時の「びゅーっ」、「びよーん」や、迷路の道探しに飽きて、絵本に指や拳をぶつけた時の「ガキン、ガキン、ガキン」や「ガン、ガン、ガン」等、動作に呼応した定型のオノマトペも現れたが、「びろーん」と言いながら絵本の上で指をくねらせながら動かすなど、定型のオノマトペと動作が異なるケースも見られた。

このように場面2ではあまり発現しなかった定型のオノマトペが場面3で多く見られたのは、身体全体を動かす活動ではなく、座って1冊の絵本を一緒に見るという、会話しやすい状態にあったことが考えられる。また、指や手を自分自身のように動かしながら絵本のイメージの世界を仲間と共に進む、迷路という絵本の特殊性にも何らかの関係性が考えられる。

絵本に描かれている絵を指差しながら面白さを共有し、笑い合った後、突然B男が「まんばらっぱあ」とまるで歌うように言った。イメージや感情を仲間と共有する中で、定型のオノマトペだけでなく独自のオノマトペも共有されていく様子が窺われた。

5. まとめ

今回の実態調査から、満2歳児では、明確なオノマトペの発言回数は多く見られなかったものの、幼児一人一人が自己表現としてオノマトペを発していることが分かった。また、保育者との会話や子ども同士の会話で行動とともにオノマトペが用いられている様子が観察された。一方、4歳児では、幼児一人一人の姿からその子なりの言葉(音)の表現を見ることができた。また、仲間と一緒に場やイメージを共有する中で発現する様々なオノマトペが確認できた。今後は、オノマトペが発せられる以前の言葉(前オノマトペ)の誕生の背景やその過程、さらに身体の動きを伴う場面において、あまりオノマトペを発しない幼児の言葉と動きの関係に着目することで、幼児における言語発達とオノマトペの位置づけが更に深まることが考えられる。

Ⅳ. まとめと今後の研究課題

今回の研究では、オノマトペに関する文献レビューから3つの視点（視点1：子どもの自由な表現、視点2：多様な感覚と動作等、視点3：多様な環境との関わりやコミュニケーション的側面）を立て、実態調査を行った。実態調査では、幼稚園における遊びの中で発せられた「まんぱらっぱあ」に代表されるような、定型ではない子どもの自由な表現としてのオノマトペが数多く見られた（視点1）。また、家庭支援センターのおままご場面での「ジャー」や幼稚園で遊び場面での「しゅ〜」「ぐおーい」などのように、動作と密接にかかわるオノマトペが観察された（視点2）。しかし、オノマトペを伴う動作と伴わない動作とがあることも観察から分った。家庭支援センターのお風呂遊び場面の「ガッチャン」やパズル見せ場面の「パッ パッ」、幼稚園での「あっあ〜」などは、環境や他者（母親や保育者）とのかかわりの中で発せられていた（視点3）。ここでのオノマトペは、喃語から一般言語獲得への過渡期にある子ども達の自己表現やコミュニケーションの中核的語彙の役割を果たしていたといえる。

本研究におけるレビューと実態調査から、図3のようなオノマトペのモデル図を試みに作成し、人間の活動の基盤となる言語活動の重要な部分にオノマトペが位置づいているという仮説を立てた。本研究の実態調査では、オノマトペの意味的側面からの分析・考察はある程度できたが、音韻的側面からの分析・考察にまで及

んでいない。今後は音韻的側面も含め、子どものオノマトペの実態について総合的に調査研究していくことにする。単なる音声と言語となり、意味を有して言語となっていく過程において、オノマトペがどのような役割を果たすのか、実態を捉えて検証していくことを今後の研究課題としたい。

引用文献

- 秋田喜美（2021）オノマトペの「不自然」な音象徴. 早稲田文学, 1035, 24-36, 筑摩書房.
- 天沼寧（1974）擬音語・擬態語辞典. 東京堂出版.
- 浅野鶴子・金田一晴彦（1979）擬音語・擬態語辞典. 角川書店.
- Bateson, M. C（1975）Mother-infant exchanges: The epigenesis of conversational interaction. Annals of the New York Academy of Sciences, 263 (1), 101-113.
- 藤井美保子（1999）コミュニケーションにおける身振りの役割—発話と身振りの発達の検討—. 教育心理学研究, 47, 87-96.
- 藤田笑美子（1990）保育園2歳児クラスで観察された話し言葉と歌の中間形式. 日本保育学会大会論文集, 43, 148-149.
- 平田佐智子（2021）オノマトペが巻き起こす議論と新たな観点. 早稲田文学, 1035, 14-23, 筑摩書房.
- 飯塚書店編集部（1999）短歌の技法オノマトペ 擬音語・

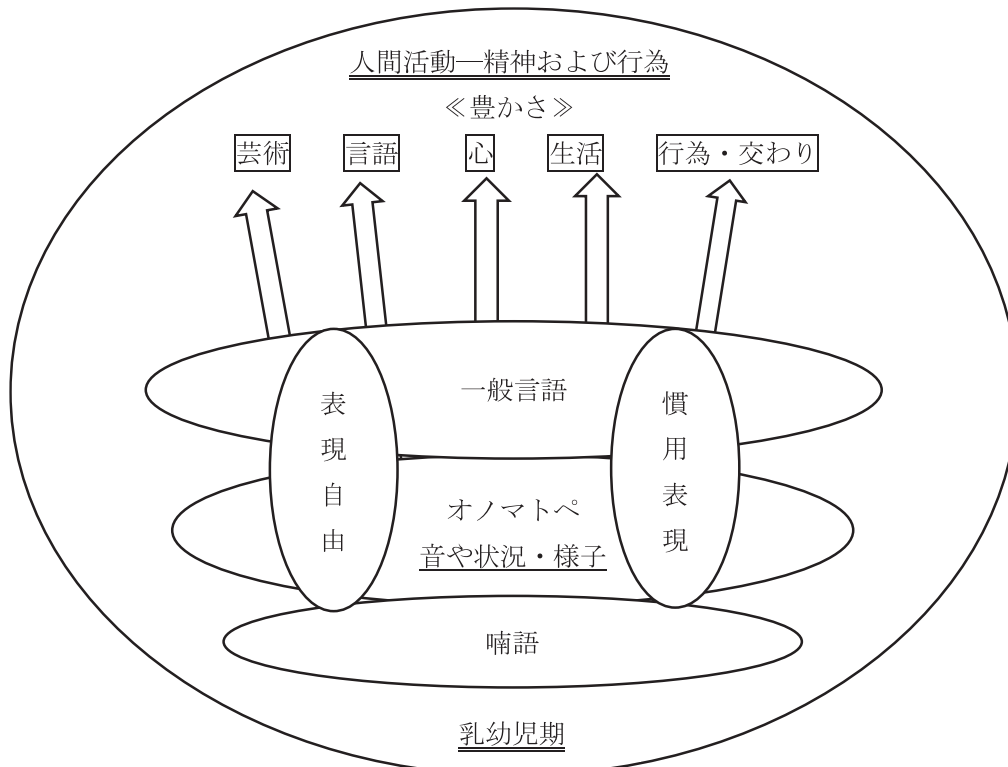


図3 オノマトペにかかわる言語習得のモデル図

- 擬態語. 飯塚書店.
- 今井和子(1996) 子どもことばの世界ー実践から捉えた乳幼児のことばと自我の育ちー. ミネルヴァ書房.
- Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., & Okada, H. (2008) Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition*, 109, 54-65.
- Imai, M. & Kita, S. (2014) The sound symbolism bootstrapping hypothesis for language acquisition and language evolution. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, 369.
- 今井むつみ(2017) オノマトペはことばの発達に役にたつの? . 窪蘭晴夫編. オノマトペの謎, 103-119, 岩波書店.
- 磯部錦司・郡司明子・島田由紀子・丁子かおる・辻 政博・辻 泰秀・中田稔・西村志磨・藤田雅也・槇英子・宮野周・渡辺一博(2014) 造形表現・図画工作. 建帛社.
- 喜多壮太郎(2002) ジェスチャー 考えるからだ. 金子書房.
- 国立国語研究所(2004) 国立国語研究所14分類語彙表ー増補改訂版. 国立国語研究所.
- 近藤綾・渡辺大介・越中康治(2008) 自然体験活動の中で見られる幼児のオノマトペの機能に関する一考察ー観察事例による検討. 広島大学大学院教育学研究紀要, 第三部, 教育人間科学関連領域, 57, 305-312.
- 厚生労働省(2018) 保育所保育指針解説. フレーベル館.
- 松崎史周・桐川敦子・望月久也(2017) 小麦粉粘土活動における幼児のオノマトペ. 日本女子体育大学紀要, 47, 93-99.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2020) 身体表現活動におけるオノマトペが幼児に想起させるイメージと動き: オノマトペの性質・意味内容に着目した実験から. 体育学研究, 65, 35-52.
- 小川鮎子・下釜綾子・高原和子・瀧信子・矢野咲子(2013) 幼児の身体表現活動を引き出す言葉かけーオノマトペを用いた動きとイメージ. 佐賀女子短期大学研究紀要, 47, 103-116.
- 小椋たみ子・増田珠巳・浜辺直子・平井純子・宮田 Susanne(2019) 日本人母親の対乳児発話の語彙特徴と子どもの言語発達. 発達心理学研究, 30(3), 153-165.
- 小野正弘(2007) 擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典. 小学館.
- 荻阪直之(1999) 感性の言葉を研究する: 擬音語・擬態語に読む心のありか. 新曜社.
- Ramachandran, V. S. & Hubbard, E. M. (2001) Synaesthesia – A window into perception, thought and language. *Journal of Consciousness Studies*, 8 (12), 3-34.
- 佐治伸郎・今井むつみ(2013) 語意習得における類像性の効果の検討ー親の発話と子どもの理解の観点から. 篠原和子・宇野良子編, オノマトペ研究の射程ー近づく音と意味, 151-166, ひつじ書房.
- 阪本一郎(1982) コトバの愛育・幼児の親近語彙表付. キリスト教幼児教育研究所.
- 佐藤伸宏(2019) オノマトペの翻訳(不)可能性ー中原中也「一つのメルヘン」と翻訳. 東北大学文学研究科研究年報, 68, 1-29.
- 千古利恵子(2019) 「子どもことば」考ーことばの獲得と言語環境の問題ー. 京都文教短期大学研究紀要, 57, 33-43.
- 高原和子・瀧信子・矢野咲子・下釜綾子(2011) 保育内容「表現」(身体表現)の指導と内容ー動きとイメージをつなげる言葉かけについてー. 福岡女学院大学紀要, 人間関係学部編, 12, 111-118.
- 上原郁美・山本真由美(2015) 保育場面における保育者のオノマトペ使用に関する意識. 徳島大学人間科学研究, 23, 1-17.
- 山田丈美(2000) オノマトペに着目した児童詩の研究ー実体を写し取る言葉の獲得ー. 愛知教育大学大学院国語研究, 8, 111-119.
- 山田丈美(2004) オノマトペに着目した中学生の言語意識に関する研究. 名古屋短期大学紀要, 42, 145-157.
- 山田丈美(2006) 擬音語・擬態語の特性と国語教育における扱いに関する研究. 言葉の力を伸ばす教育, 80-94, Hon'sペンギン.
- 山田丈美(2006) 新聞見出しに着目した擬音語・擬態語の研究. 名古屋短期大学紀要, 44, 221-233.
- 山口仲美(2019) オノマトペの歴史1: その種々相と史的推移「おべんちゃら」などの語史. 山口仲美著作集5, 風間書房.
- 山口仲美(2019) オノマトペの歴史2: ちんちん千鳥のなく声は犬は「びよ」と鳴いていた. 山口仲美著作集6, 風間書房.

【付記】

本研究は、2021年度中部学院大学教育改革研究事業の研究費助成を受け、中部学院大学と北陸学院大学との間で行った共同研究である。近年、両大学では継続した研究交流がなされており、本研究もその一環である。本稿をまとめるにあたっては、別府悦子・西垣吉之・下内充の各氏に助言・指導を頂いた。

The Study of Onomatopoeia from the Developmental Perspective — The Process of Language Production —

Takemi YAMADA, Misato HAYASHI, Ken YAGETA, Yusuke UMEDA,
Yu MIZUNO, Noriko DALRYMPLE, Kensuke NAKAJIMA,
Keiko TANABE, and Maki TAKAMURA

Abstract : Onomatopoeic expressions have been attracting attention in various fields, but have not previously been explored in terms of early childhood development. This study reexamines the definition and context of onomatopoeia, and determines its significance in children's language development through a review of existing knowledge on the topic. Specifically, a literature review was conducted in the fields of (i) language and culture, (ii) psychology and human relations, (iii) physical expression, (iv) formative expression, and (v) life and environment. Our results provide suggestions for future research on onomatopoeia from the perspective of early childhood development.

Keywords : onomatopoeia, development, language acquisition